

市民支える日本のNGO



三木 幸治

イスラエルとパレスチナの戦闘に、終わりが見えない。昨年5月に起きたイスラエルとパレスチナ・ガザを支配するイスラ

ム組織ハマスの紛争では、双方合わせて270人以上が死亡し、2900人以上が負傷。今年8月には、イスラエルとガザを拠点とするイスラム過激派「イスラム聖戦」が戦い、40人以上が死亡した。

戦闘には双方の言い分があるのだが、被害を受けるのは、日々の暮らしを一生懸命紡いでいる市民たちだ。中東から遠く離れた日本を拠点とするNGOは、ガザで市民の声を聞き、人々の生活を直接支援している。

「自力で動き、トイレにも行けるようになった。本当に感謝しています」。ガザ市に住むマオイヤ・アルワヒデイさん(43)は、記者がNGO「パレスチナ子どものキャンペーン」(本部・東京都)の支援について聞くと、目を輝かせた。

昨年5月、イスラエル軍はハマス幹部らを狙い、激しい空爆を繰り返した。マオイヤさんが勤める理

容店の近くでも、乗用車が爆撃された。爆風だけがその時、2度目の爆撃があった。マオイヤさんの右足は太ももから下が吹き飛び、左足も損傷した。

一命は取り留めたが、動くことはままならない。リハビリが必要だったが、自宅から遠い病院に通うこともできない。そんな時、理学療法士を自宅に派遣してくれたのが、NGOだった。空爆から1年。痛みを耐えながらリハビリを続け、ついに松葉杖を使えば自力で歩くことが可能になった。NGOが提供した電動車椅子を使い、パートタイマーとして職場復帰も果たしたという。「家族に迷惑をかけることが少なくなり、希望が見えた」。マオイヤさんはそう言って笑った。

「パレスチナ子どものキャンペーン」はリハビリ支援のほか、市民に心理カウンセリングを提供。経済的に困窮した人には食料購入の支援もしている。

イスラエルとパレスチナの戦闘は次回、いつ起こるか分からない。政治的な解決が遠い中、ガザで活動する日本のNGOは、少しでも市民の苦しみを和らげようと、精いっぱい活動を続けている。